

新資料紹介：張赫宙の葉書2枚と直筆原稿

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024550

新資料紹介：張赫宙の葉書2枚と直筆原稿

南 富 鎮

1. 張赫宙という作家

張赫宙の直筆葉書2枚を入手したのでこれを紹介したい。ついでに直筆原稿の一部も紹介したい。

張赫宙は、近年では日韓の近代文学研究者の間で一定の認知を得ているが、それでもまだ馴染みの薄い作家に属する。まずは張赫宙について少し触れておく。

張赫宙(1905-1997)は、一般に植民地期日本語作家として認知されているが、じつに複雑な側面を持つ作家である。朝鮮で生まれ、植民地期の日本語教育を受け、朝鮮語と日本語で膨大な作品を書き、アジアにおける帝国主義の論理に抵抗しつつ、屈服し、場合には協力しながら、帝国主義の終焉とともに衰微し、忘却された作家である。アジアにおける20世紀の植民地主義と盛衰をともにしている。

日本近代文学や朝鮮近代文学での狭い評価とは別に、張の文学をアジア近代文学史の観点から眺めた場合、20世紀のアジアの近代化と植民地主義を、一身をもって体現した作家が張赫宙と言える。これから何百年ほどの時が経過し、20世紀の文学・思想がいずれ歴史的に遠望された場合、あるいはアジア近代文学史の全体像が眺望された時、20世紀の帝国主義を説明するに張赫宙ほど適した作家は少ないと思われる。もちろんこうした論者(私)の勝手な推測と予言は、張の個別作品の素晴らしさから発生するものではない。評価と価値の所在は、張の個別作品の優劣にあるのではなく、張が実践した文学の方向性と実践過程が、アジア文学の20世紀を最もよく反映しているからである。

個別作家・作品の優劣的な評価は、個別国家と個別言語の文化性を離れ、地域を広め、長い歴史的スパンを投影させれば、全く違う評価の軸と風景が新たに見えてくる。張の文学を考える時、私は出来るかぎり、アジアの近代文学史

と20世紀の植民地主義を、現在から突き放し、二・三百年後の遠い未来の歴史的な地点から眺めようと心掛けている。現在の固定的な評価の偏狭さから距離を置くためである。要するに、張の文学に対する評価はいまだに定まっていないと私は思っている。

2. 直筆葉書と直筆原稿

直筆葉書2枚と直筆原稿を私が入手したのは、よくありそうな奇縁からではなく、それがたんに古書店で、買い取り手もないまま、たいへん安価で売られていたからである。日本近代文学研究者なら誰もが経験すると思われるが、作家の直筆原稿の入手はたいへん難しい。文学史に少しでも名前が出る作家ならばほとんどが研究者の手には届かない金額が設定される。それで大概の研究者は致し方なく、記念館や文学資料館へ赴いたり、あるいは写真資料集で直筆を確認したりする。

直筆原稿を確認するのは、新しい資料的発見の側面もあるが、それ以上に直筆手蹟から作家の存在が身近に感じられるからである。手蹟には作家の個性や気質、作品の雰囲気、あるいは活字では感じられない思想の背景や時代の雰囲気が体臭のように漂っている。直筆原稿、直筆葉書などが高価で売買されるのは、こうした雰囲気への好奇心を直に満足させてくれるからであり、記念館や文学資料館が購入し、陳列するのも同じ理由からであろう。

当たり前のことをくどくど書いたが、要するに、張赫宙の直筆原稿や直筆葉書などを展示・保管した記念館や文学資料館は、管見の限りでは、日韓において存在しない。収集と展示に値しないと判断されているのかもしれない。こうした需要の側面からも分かるように、日韓において張の評価はいまだ高くないといえる。だから値段も安価なのであろう。このような事情で、張赫宙の場合は、直筆原稿がどこかの資料館や記念館に保存され、作家の体臭のようなものを感じることができ多くの作家とは違い、それが一切不可能である。張がどのように日本語（仮名）を書き、どのような日本漢字を書いたのか、殆ど知られていないのである。周知のことだが、張は植民地期教育課程による日本語教育を受け、朝鮮語を母語としながらも、日本語作家になった特殊な経歴の持ち主である。後天的に習得した張の日本語の読み書きは、一般の日本人作家の日本語表記とは違う意義を持つと思われる。植民地期の歴史性を滲ませているのである。本資料を公開する意義はそこにある。

3. 葉書2枚

以下、葉書2枚を紹介する。写真でも一部判読できると思われるが、以下、活字にしておく。

- ①アンケート『レッツェンゾ』（紀伊國屋出版部）1934年10月号「もし文学を志望してゐなかつたら私の志望は？」

[表宛名]

往復郵便はがき

消印：大邱 9（昭和9年）9.2（9月2日）

住所：大邱市南山町四七四 張赫宙 九月二日

[裏本文]

若し私が文学を志望してゐなかつたら何を志望してゐたか？

答。私が文学を以て身を立てようと思ひ始めたのは十八九才の頃。それが二十一、二のときまでつづき数多の習作をしたが、その頃、この半島には猛烈な社会主義運動が風靡して居り、私も自分自身のそれへの情熱に動かされ、実地運動に身をなげ入れしも永くつづかず、再び文学志望に立ちかへり、三十までに文壇に出られなければ死ぬとさへ決心してゐた。今年私は数へ年三十である。幸に死なずに済んだが、さて、文学を志望してゐなかつたら、と考へると全く見当に迷ふ。といふのは文学以外には私の生存を保つやうな仕事はなかつたから。しかし、よく考へると少年時代、大の英雄主義であつた私は政治家にならうとしたかも知れない。

- ②アンケート『あらくれ』（紀伊國屋出版部）1934年12月号「本年の自作と世評」

[表宛名]

往復郵便はがき

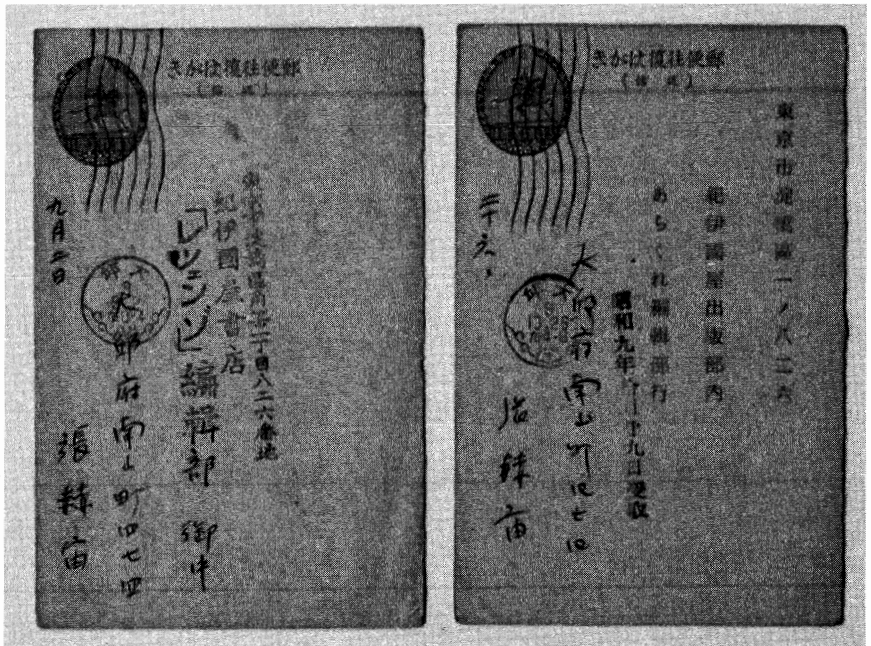
消印：大邱 9（昭和9年）10.26（10月26日）

住所：大邱市南山町四七四 張赫宙 二十六

〔裏本文〕

今年発表の作品は、「女房」「山犬」(文藝首都。一月と五月)「ガルボウ」「葬式の夜の出来事」「十六夜に」(文藝。三月、七月、十一月)「劣情漢」(行動。六月)の六作と十二月にもう一作発表されますが、全部で七作になります。このうち「劣情漢」は大病を患つてゐる最中に一日に一枚づつ文字通り苦心して出来上つたもので、とても心配しましたが好評でした。他の作品も悪評は一つもなく、概して問題になつたやうでしたが、中にも「劣情漢」のときは大へんうれしかつたのです。

以上の外に「児童」の創作欄に十一月号より連載し始めた長編「霊と肉」がありますが、この方も注意して頂けたら、と願つてゐます。従来小生をハンディキャップなる文字で侮辱してゐた連中を完全にうちのめしてやつたのは痛快。この点千葉亀雄氏(行動十月)も認めて下さつて有難かつた。



左は①の表、右は②の表



左は①の裏本文、右は②の裏本文

4. 雑誌掲載文との相違

張赫宙発信の往復はがきの内容と掲載雑誌の文面を比較検討したが、相違は見られなかった。おそらく作者による校正はなかったと思われ、出版社編集部において文章的な確認を行ったうえ、そのままの掲載となったと推測される。「それへの」に付された傍点だけが活字では外されている。

5. 葉書資料の分析と意義

まず2点とも張赫宙が創作の根拠を日本に移す前に書かれたものである。張は1936年6月頃に日本へ創作の拠点を移しているが、それ以前は朝鮮大邱市南山町で執筆活動を行っていた。文壇に出てからほぼ4年以上も地方都市で創作活動をしていたことになる。じつは張の主要傑作はほとんどこの時期に書かれており、創作活動ももっとも旺盛であった。原稿の依頼は、日本語の場合は東

京、朝鮮語の場合は当時の京城（ソウル）からであったと思われるが、中央文壇（東京、京城）から遠く離れた植民地の地方都市で秀作を発表し続けていたことになる。本論紹介の葉書2枚、直筆原稿2点も朝鮮大邱で書かれたものである。

葉書資料①の意義は、張の文学的な出発に関する記述が述べられている点である。張は自己の文学修業時代、創作動機、文学的抱負などについては多くを述べている方だが、本資料においてそれがより具体的に見られる。張は、「十八九才の頃」に、「文学を以て身を立ようと思ひ始め」、「二十一、二のときまでつづき数多の習作」を試み、同じ頃、朝鮮半島の「猛烈な社会主義運動」にも情熱を傾けていたが、結局は「永くつづかず、再び文学志望に立ちかへり」と述べている。こうした年譜的事実は、白川豊氏による張赫宙の詳細な年譜記録からも窺うことができ、内容もほぼ一致している（『張赫宙研究』東国大学校出版部、朝鮮語、2010）。

上記2枚の葉書はいにく白川氏の調査から漏れているが、やや注目に値するのは、「三十までに文壇に出られなければ死ぬとさへ決心してゐた」という言葉である。「文壇」とはおそらく日本の文壇のことであろう。十八九歳の時からほぼ命を懸けて日本文壇を目指すという執着と激しい情熱を持っていたことが窺える。

葉書②は、1934年に書いた創作を年譜的に記録したものである。より詳しい創作年譜は白川氏の前掲書から確認することができるが、新たな年譜的事項として、「劣情漢」の創作時期に「大病を患つて」いたことが確認できる。「劣情漢」は『行動』1934年6月号に掲載された作品であるが、直筆原稿の末尾には、「一九三四、四、二八」という脱稿日付が付されており、「大病を患つて」いたのは、おそらく4月であったと推測される。同年3月に、張は自己文学の基調をなす大表作「仁王洞時代」を書き上げている。

葉書文中の「従来小生をハンディキャップなる文字で侮辱してゐた連中を完全にうちのめしてやつたのは痛快」云々というのは、千葉竜雄「注目すべき新人」（『行動』1934年10月号）での賞賛と関連している。千葉は、張の持つ「ハンディキャップに同情して、多少甘やかし過ぎはしないかと心配される批評が時にあつた」が、張の作品はそれらの心配を払拭するほどの上出来であると激賞している。こうした評価は、張にとって特別に嬉しいものだったのであろう。

6. 張赫宙の直筆原稿

以上の郵便葉書2枚の他に、筆者の手元にある直筆原稿から2点ほどを紹介する。植民地期日本語作家が、どのように日本語原稿で書いたのかを示すためである。2作とも雑誌掲載を経て単行本に収録された作品である。綿密な比較検討を行ってはいないが、直筆原稿と雑誌掲載作品の内容はほぼ一致している。朱を入れた箇所はなく、ほぼ初校と思われる直筆原稿がそのまま初出作となっている。外地（朝鮮）とのやり取りに関わる郵便事情も影響したのだろうか。大掛かりに校正を重ねた形跡は見当たらない。原稿を見るかぎり、日本語の書き方に滞りはなく、すらすら日本文を書いたような印象である。

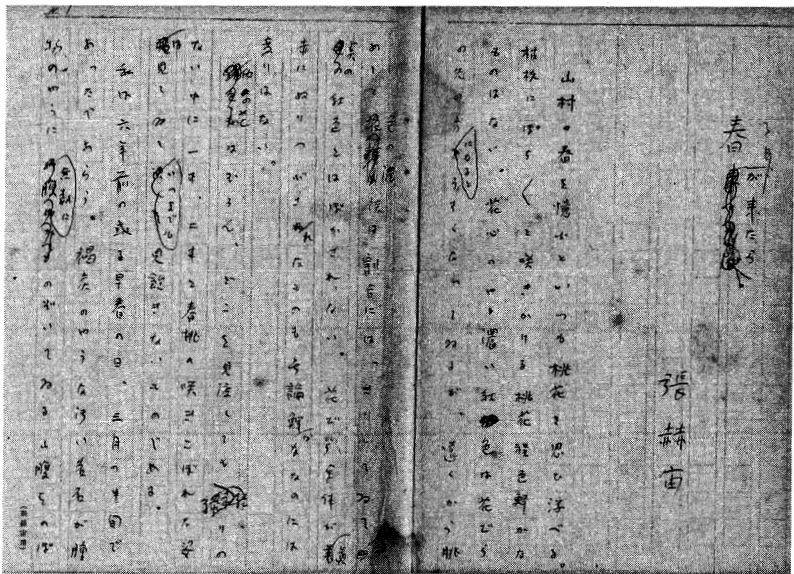
③「劣情漢」は当初「卑劣漢」と題されたが、「劣情漢」に修正され（『行動』1934年6月号）、単行本『仁王洞時代』（1935）に収録する際「劣情者」と直されている。「愚劣漢」（『文藝』1935年4月）と題名の類似を避けたかたのであろう。肉筆原稿の末尾には、「一九三四、四、二八」という日付がある。

④「春が来たら」は当初「春来りなば」と題されたが、「春が来たら」で入稿した後（掲載誌は不明）、単行本『わが風土記』（1942）に収録する際には「春来りなば」と、当初の題に戻したと推測される。単行本には「昭和9年3月」という日付があるが、肉筆原稿には日付が見当たらない。肉筆原稿と単行本においての大幅な変更は見られない。

ちなみに、原稿用紙は、左端隅に「（張赫宙用）」と印字した特注のものを使用している。作家として生きるそれなりの覚悟を読み取ることもできる。



③「劣情漢」直筆原稿



④「春が来たら」直筆原稿